

本論文は

世界経済評論 2020年5/6月号

(2020年5月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

フランシス・パーキンスと社会改革



佐藤 紘彰

Frances Perkins にぼくが初めて触れたのは、20年ほど前、真珠湾攻撃が問題になっていた時だった。フランクリン・ルーズベルト大統領は日本海軍の動きを予め知っていたのかどうかという議論である。そこでぼくは Japan Times に「Was Pearl Harbor really a surprise?」（2001年1月29日）というコラムを書いた。

これを思い出させたのは月刊誌「Harper's」（2020年1月号）の Kevin Baker の記事「On Courage」だが、記事は昨年9月 Elizabeth Warren 民主党大統領候補がニューヨークの遊説にやってきた時の演説でフランシス・パーキンスを取り上げたことに触れる。

「ニューディールが始まった日」

ウォーレンの演説（<https://elizabethwarren.com/nyc-speech>）に Washington Square Park には、2万人が集まった。「1911年3月25日土曜日の午後4時45分近く、あのビルの上層3階から煙と火炎が噴き出した」とウォーレンが話し始めたのは Triangle Shirtwaist 工場火災である。犠牲者は146名、うち123名は女性、女性の大半は14歳の少女を含む23歳以下の人たちだった。この縫製工場は低賃金で長時間労働を強いる sweatshop の典型で、労働者の大半はイタリア人とユダヤ人の若い女性。移民したばかりだった。

現在のマンハッタンからは想像できないが、この島は第二次大戦が終わるまで住民の6割が製造業で働いた。もっとも東京では割合はもっと高かったろう。

「移民」を除けば、この工場は『女工哀史』を思わせるが、この火災をニューヨークの歴史では最悪の、アメリカの歴史でも有数の産業災害にしたのは、工場が高層ビルの8~10階と最上部にあった時に消防車の梯子は最高6階までしか届か

なかったこと、しかも女工が端切れを盗むのを防止するためとして工場の出入り口には鍵をかけていたことだ。その結果、窓から飛び降りて死んだ62名のひとたち以外の多くが出入り口に重なって死んでいたという。

たまたま火災が起こった時、公園の反対側で友達とお茶を飲んでいたパーキンスは現場に駆けつけてこの惨劇を目撃した。そして後にルーズベルトの労働長官になったが、「New Deal はこの日に始まった」と言ったそうだ。

全国消費者連盟と社会主義

火事を目撃者のうち Rose Schneiderman は既に社会主義者かつ労働組合指導者、Louis Waldman は社会主義党の指導者かつ労働問題専門の弁護士になったが、シュナイダーマンは、1882年ポーランド生まれのユダヤ移民、同年ウクライナ生まれのウォルドマンもユダヤ移民で、ともに先鋭的な社会意識を育てる環境で成長したと言える。これに対し、パーキンスは1880年マサチューセッツ州の保守的中産階級に生まれた。そして高等教育を受ける人たちが極めて少なかった当時、女子大 Mount Holyoke College に進んだ。

それでも、同大で「貧困人は自分が悪い」という一般的な見方は間違っていると説く教授に感銘を受けた。また、1899年ニューヨークで誕生したばかりの National Consumers League の創立者の講演を聞いて社会改革に目覚めたという。

「全国消費者連盟」と聞けば今なら消費者保護を思うだろうが、19世紀末にできたこの連盟は消費物資の良し悪しの判断ではなく、消費物を作る労働者が公正な状況で働くよう目指した。つまり、1日8時間労働、女性労働者の最低賃金、児

童労働の禁止などを追求するものだった。要するに sweatshop の廃絶である。

設立者は Jane Adams と Josephine Lowell, 初代会長 (secretary) は Florence Kelley と、皆女性だった。うちアダムズとケリーは社会主義に深く関わっており、特にケリーは若い時ヨーロッパで勉強した頃からマルクスとエンゲルスの信奉者で、訳したエンゲルスの『英国の労働階級の状況』はエンゲルス自身の序文を添えたものが現在も使われている。

パーキンズは大学卒業後、父の意向で教職を見つけてイリノイ州に引っ越したが、父の目から離れると、暇を見つけてシカゴの Hull House に通った。これはアダムズが始めた移民援助団体で、ここで貧困者の状況と援助および労働者の組織のやり方を学んだ。パーキンズはこれを天職と見做し、同じような仕事をフィラデルフィアに見つけて移り、そこでの職務の一つは移民や黒人の女性が売春を強いられるのを防ぐことだった。

二年後パーキンズはニューヨークのボヘミアン精神の横溢する Village に移動、コロンビア大学で社会事業と政治学で修士号を取得。一方全国消費者連盟で働いたが、上記の火災のあと連盟を辞め、ニューヨーク市の Committee on Safety の執行役員になった。この仕事のために州都オールバニーに通って州議員に労働環境改善を説き、職場安全については第一級の専門家になった。1919年、アル・スミスが知事になると Industrial Commission の三人の委員の一人になり、1929年ルーズベルトが知事になると同委員会の委員長になった。

その秋、株価が暴落、パーキンズは産業安定と失業対策を担当した。

かくて、1933年ルーズベルトは大統領になるとパーキンズを労働長官に指名、アメリカ史初の女性大統領閣僚になった。そして、労働長官として Social Security のほか、失業保険、最低賃金法、児童労働禁止、労働組合の結成の自由など、

重要な労働法を立案し、成立させた。ニューディールの主体である。

また、大恐慌に直接対処するために、若い失業者に仕事を与える Civilian Conservation Corporation の設立に参加した。この CCC は最盛時 30 万人を雇ったといわれる。

無知無学のトランプ大統領

歴史小説家かつ社会評論家のケヴィン・ベイカーが、2019年9月、エリザベス・ウォーレン民主党大統領候補の演説を聞きに行ったのは、トランプという「無知無学で、現実を見ない、かつ底知らぬ精神的に不安定な」大統領の下に国民が逼塞状態に置かれているアメリカで、ウォーレン候補が大きな社会変革を標榜しているためだ。

事実、アメリカは問題が多い、とベイカーは指摘する。たとえば、議員は1日の4-5時間を選挙資金集めに過ごす。全世界に80か国にまたがって軍事基地を800も維持している。個々にとっても法外なカネのかかる医療費。なぜそうしたことを国民は問題にしないのか。医療費といえば、他の先進国ではすべて基本的保険制度を採択実施している時に、オバマケアにすら「階級闘争」を持ち出して騒ぐ Leon Cooperman のような億万長者が幅をきかせる。

また、ウォーレンの提案をニューディールを拡大するものと嘲る自称「民主党员」金融業者 Steven Rattner が政府顧問なったりする。

パーキンズは、ルーズベルトが就任から4度目の当選後ほどなく病死して辞職するまで労働長官を勤めた。ルーズベルトが死ぬと出版社からパーキンズに大統領のことを書く依頼が殺到した。そこで書いたのが『The Roosevelt I Knew』だったが、真珠湾云々は、この本の二、三のルーズベルト描写に関わる。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY